"*Djadovo Studies*" 2
東海大学トラキア発掘調査団 2000『デャドヴォ遺跡（ブルガリア）第13次発掘調査報告（1999）』"*Djadovo Studies*" 3（印刷中）
西秋良宏　1998『日本の西アジア考古学調査小史』「日本考古学」6　p.170-181
西秋良宏　1999『日本の西アジア考古学調査—回顧と展望』「日本西アジア考古学会第4回総会・研究発表会」プログラム　p.9-13

Fol,A., Katinčarov,R., Best,J., Vries,N.de, Shoju,K. and Suzuki, H. eds., 1989 "Djadovo-Bulgarian, Dutch,Japanese Expedition, Vol.1 Mediaeval Settlement and Necropolis (11th-12th Century)" Tokai University Press
Sekine T. and Kamuro H. eds., 1998 "Djadovo Excavation 1997 -A Preliminary Report on the 11th Excavation at Djadovo, Bulgaria", *Djadovo Studies* 1
Sekine T. and Kamuro H. eds., 1999 "Djadovo Excavation 1998 -A Preliminary Report on the 12th Excavation at Djadovo, Bulgaria", *Djadovo Studies* 2
Sekine T. and Kamuro H. eds., 2000 "Djadovo Excavation 1999 -A preliminary Report on the 13th Excavation at Djadovo, Bulgaria", *Djadovo Studies* 3 (in printing)

同時にブルガリアにおける考古学発掘の状況を把握し，2～3年後に，単独の古墳を調査してみたいと考える』との「方針」が述べられている（「バルカン・小アジア研究」10, p.51, 1984）。

参考文献

青柳正規　1999『海外における遺跡調査の現状と展望』　「学術月報」52-1 p.4-8

青柳正規，赤澤　威，大貫良夫，西秋良宏，西村　康　1999『（座談会）海外の遺跡調査――その魅力と問題点――』「学術月報」52-1 p.50-73

禿　仁志 1986『ブルガリアの遺跡』「高校通信東書日本史・世界史」119　東京書籍

禿　仁志　1990　『ブルガリアにおける発掘調査とその周辺』　季刊「文明のクロスロード」33 p.9-16

禿　仁志　1999　『ブルガリア，デャドヴォ遺跡の発掘調査――国際共同調査の一実例――』「学術月報」52-1 p.28-34

禿　仁志 2000　『ブルガリアの青銅器時代――テル・デャドヴォ遺跡の発掘――』「第6回西アジア発掘調査報告会報告集」p.92-97　日本西アジア考古学会

禿　仁志　2000　『ブルガリア・デャドヴォ遺跡の発掘（1997～1999）』（平成9～11年度科学研究費補助金基盤研究(A)(2)研究成果報告書）p.1-53

禿　仁志，金原保夫，田尾誠敏　1995『ブルガリア共和国デャドヴォ遺跡の発掘調査と周辺遺跡の分布調査』「日本考古学協会第61回総会・研究発表要旨」p.90-93

尚樹啓太郎　1993『足利記念バルカン・小アジア研究センター』「東海大学五十年史（部局編）」p.455-469

関根孝夫，禿　仁志　1995『ブルガリアの遺跡』「東海大学の考古学調査――湘南キャンパスとブルガリアの遺跡」（第6回足もとに眠る歴史展示解説）　p.14-19

東海大学トラキア発掘調査団 1984『ブルガリアにおけるトラキア遺跡発掘計画に関する予備調査報告書』「バルカン・小アジア研究」10　p.49-52 東海大学文明研究所

東海大学トラキア発掘調査団　1986　『デャドヴォ遺跡（ブルガリア）発掘調査概報（1985）』「バルカン・小アジア研究」12　p.15-33 東海大学文明研究所

東海大学トラキア発掘調査団　1987『デャドヴォ遺跡（ブルガリア）発掘調査概報（1986）』　「バルカン・小アジア研究」13 p.55-70

東海大学トラキア発掘調査団　1988『デャドヴォ遺跡（ブルガリア）発掘調査概報（1987）』「バルカン・小アジア研究」14 p.85-106

東海大学トラキア発掘調査団　1989『デャドヴォ遺跡（ブルガリア）発掘調査概報（1988）』「バルカン・小アジア研究」15　p.53-75

東海大学トラキア発掘調査団　1990『デャドヴォ遺跡（ブルガリア）第6次発掘調査概報（1989）』「バルカン・小アジア研究」17 p.39-78

東海大学トラキア発掘調査団　1991『デャドヴォ遺跡（ブルガリア）第7次発掘調査概報（1990）』「バルカン・小アジア研究」18 p.43-86

東海大学トラキア発掘調査団　1995『デャドヴォ遺跡（ブルガリア）第8次発掘調査概報（1993）』「バルカン・小アジア研究」19　p.21-80

東海大学トラキア発掘調査団　1996『デャドヴォ遺跡（ブルガリア）第9次発掘調査概報（1994）』「バルカン・小アジア研究」20　p.29-63

東海大学トラキア発掘調査団1996『デャドヴォ遺跡（ブルガリア）第10次発掘調査概報（1995）』「バルカン・小アジア研究」20　p.65-96

東海大学トラキア発掘調査団 1998『デャドヴォ遺跡（ブルガリア）第11次発掘調査報告（1997）』*"Djadovo Studies"* 1

東海大学トラキア発掘調査団 1999『デャドヴォ遺跡（ブルガリア）第12次発掘調査報告（1998）』

13次に亘るブルガリアでの調査により，トラキア平野中の1遺跡「テル・デャドヴォ」の青銅器時代集落の変遷について基礎資料を得ることができた。しかし青銅器時代文化層に限っても，調査は完全に終了した訳ではなく，なお数回の補足調査が必要とされている。またこれまでの調査によって得られた膨大な資料の分析も，これからの重要な仕事である[9]。当初，調査の開始にあたって計画されていたようなトラキア古墳発掘への路線転換も[10]，これら残された仕事の見通しの中で語られなければならないことは当然であろう。関係諸氏，諸機関のなお一層のご理解，ご協力を仰ぐ次第である。

(2000.2.20稿了)

(当初，本稿は考古学教室開室20周年を記念・回顧する論文集中に，「東海大学の海外調査」と題して発表するため執筆されたものである。その後本計画実施が断念されたため，今回本紀要にほぼそのままのかたちで掲載させて頂くことにした。)

(2000.5.26追記)

註

1）肩書きは当時のもの。以下同じ。

2）但しM.カンチェフ氏は1991年に急逝された。

3）J/23区は遺跡斜面部にかかるため，実質的には14グリッド分，350平方mの調査区である。

4）尚樹前掲論文ではこの時の調査を「第8次トラキア調査」として記載しているが，遺跡発掘を伴っていないため，本稿では調査年次に数えていない（尚樹1993)。

5）調査の蓄積の中で，「集落構造の分析とその時間的変遷」という課題が解明すべきテーマとして浮かび上がってきたように思われる。これは遺跡の内部構造の分析を通して解明される課題である。そして，他遺跡資料との比較研究を通して得られる「文化系統論」的研究と併せて，はじめて「トラキア民族の起源と形成」という大テーマに考古学的手法をもって迫れることになるのであろう。

6）100年を越えるような長期にわたる継続的，定点的な調査はヨーロッパ諸国では決して珍しいことではない。数年単位で調査遺跡を変える，あるいは変えざるを得ない日本の「神風」調査は，むしろ特殊な部類に属するものかもしれない。但し日本隊の調査対象の多くが一般の「ムラ」を対象とする先史遺跡であり，都城址や宮殿址，神殿址等の，文明の所産である大型複合遺跡ではないことも，調査の長期化には繋がりにくいことの一つの説明になるであろう。

7）日本の海外調査の大きな問題として，現地に「調査基地」あるいは「拠点」がないことが挙げられる。科学研究費の支給を得て実施される調査では，「調査基地」を整備する余裕がないのが普通である。「調査基地」の存在は，単に調査の継続性の面だけでなく，調査成果の地元への還元，研究者間の交流と情報の交換，若手研究者の育成等の問題にも直結する。赤澤威氏は前記「座談会」において『ヨーロッパの研究者が，西アジアで継続的に10年，20年，30年というレンジで仕事を継続しているのは，やっぱり海外拠点があるからなんですよね。同時に，海外拠点があれば，その地域を専門にする研究者も育つんですよ。だからもう，循環ですよね。』(p.66）という発言はその事情を述べたものである。我々のブルガリアでの調査は，その「拠点」が先方より与えられている希有な例である。

8）当初は東海大学文明研究所「足利記念バルカン・小アジア研究センター」が「調査室」の機能を果たしていたといえる。しかしその後本研究センターは機構改革の中で消滅し，調査の実務，報告書作成作業等すべてが考古学研究室の日常業務の中で細々と続けられることとなった。

9）補足調査，資料整理については科学研究費の支給を受けにくいと思われる。しかし発掘調査を実施できなくても，現地へ行って資料整理等を行うことは，相互の信頼関係を維持する上にも必要なことである（青柳，赤澤，大貫，西秋，西村1999)。

10）前述した「予備調査報告書」中に，『東海大学隊は，まずデャドヴォ遺跡の発掘に参加しながら，

質的には日本人のスタッフが日本式の発掘方法を用いて行う「日本隊」としての調査であることが一般的である。しかし既に述べたように，我々のブルガリアでの調査は，同一の遺跡の異なる地区を，それぞれの調査方法をとりながら複数の調査団が調査する，というかたちをとって出発した。最終報告書の作成まで多くの解決すべき問題が残されており，国際協力の実が問われることにもなるであろう。

以上述べた3点は，我々のブルガリアでの調査の根幹的な部分での特徴である。以下では調査のやや表層的な部分の特徴について述べてみたい。

まず第1点として，海外発掘調査としては異例に短い調査期間が挙げられる。例えば1997年の第11次調査は現地での調査期間が僅か20日間であったし，比較的長く調査期間をとることができた翌1998年の第12次調査でも4週間の期日に過ぎなかった。調査開始の準備と，終了に際して行わなければならない諸作業を考えれば，実質僅かな期日でその年度の研究課題を遂行しなければならないことになる。これは大学の研究室を調査母体とする場合はどの調査団にもおおむね共通することであろうが，本学の場合は特に夏期の休暇中にも公的行事が入っていたり，大学規則により出張期間が30日未満に限られていたりと，海外調査に対する制約が大きい。海外調査の出費のほとんどが渡航費関係で占められ，また調査準備・実施にあたって費やされる多大のエネルギーを考えれば，実質2～3週間の調査は余りにも短いと言わざるを得ない。もう少し中身のある調査が保証されるような余裕のあるスケジュールを組みたいものと希望している。

第2に，学生の調査参加が計られるようになってから，ブルガリアの調査は学生にとって「実習的意義」，「教育的意味」を持つようになってきたといえることである。勿論調査参加は，学生の自由意志によるヴォランティア参加であり，授業のカリキュラムとは一切関係しないが，発掘調査から資料整理，報告書作成作業までの一連の作業に，主体的に関わりを持つことのできる数少ない機会ともなっている。日本国内においても近年合宿をしながらの発掘調査自体が大変珍しく，それだけでも思い出深いものであろうが，異文化の中で，同世代の若者たちと共同で仕事を行う経験は何ものにも代え難い貴重な経験となるものであろう。学部学生のうちから海外調査に参加することは本学学生の恵まれた環境を示すものである。願わくばその経験が研究者として，あるいはそれぞれの道で今後に生かされることを期待している。

第3に，例えば「調査室」のような調査のための恒常的な組織がないため[8]，現地調査から戻ると関係者が調査団として集まる機会が極端に減ってしまい，日常の忙しさの中に埋没してしまうことが挙げられる。しかしこれは我々の取り組みの問題であって，整理・研究のために積極的に組織を立ち上げればこのような問題点は解消される筈であろうが，実際は大学での雑事の圧倒的な量の前に，その年度の会計報告と調査報告の作成，翌年の計画書作成を何とかこなすだけで一年が過ぎ去ってしまうのが現実である。今は第一次調査を除いて，何とか報告書を途切れることなく刊行できていることに満足するしかない。個々の研究は *Djadovo Studies* 等を活用してすすめ，最終報告の足掛かりとしたいと念じている。

調査団によって行われてから半世紀近くがたとうとしている。その間，特に1980年代以降我が国の多数の調査隊が西アジアを中心に世界各地で現地調査を実施するようになった。日本西アジア考古学会が生まれるそもそもの機縁となった1990年開催の「大学と科学」公開シンポジウム『文明発祥の地からのメッセージ――メソポタミアからナイルまで――』も，各調査団が抱えている多くの情報と経験を互いに共有化するために始められたものであったといえる。それまでの海外調査の流れを総括し，今後のあるべき姿を展望しようとの試みが近年目立つようになってきた。前述した「学術月報」の特集号でも，主に東京大学の研究者を中心とした海外調査に対する座談会がもたれている。その座談会に出席された西秋良宏氏は，東海大学で開催された1999年度の日本西アジア考古学会の研究発表において，明治以降の日本人の海外調査の歴史を辿る中で，その時代的特徴をまとめている（西秋1999）。

さてそのような目で見る時，我々のブルガリア・デャドヴォ遺跡の調査は，どのような性格と特徴をもったものとして位置づけられるであろうか。

まず第一に挙げなくてはならないのは，調査開始の経緯の点である。そもそもブルガリアでの発掘調査は，東海大学前総長の松前重義氏による東欧社会主義圏に対する独自の民間外交活動に端を発したものであり，また文学部内にバルカン，ビザンツ史の専門研究者を複数擁していたことが調査を開始するにあたって大きな意味を持っていた。そのような意味から言えば，正に東海大学であったからこそ始められた調査といっても過言ではないのである。但し現場で実際に調査を担当することになる考古学の側から言えば，当初はまず調査することが先にあり，テーマは後から着いてきたという「テーマ後追い」型調査であった側面は否定できない。確かに調査の総合的テーマは「トラキア史研究」であり，トラキア平野中の青銅器時代遺跡を発掘することにより「トラキア民族の起源と形成」の問題に迫ることにあった。しかしこのレヴェルの問題設定では，ブルガリアにおける考古学経験の全くない我々にとってはなお抽象的過ぎるテーマであった。より具体的に，遺跡を発掘する中で青銅器時代文化の編年を確立し，文化動態と文化系統を考古学的手段により明らかにすること，という研究目的を互いに共有するようになるのは，調査を繰り返す中からであったように思われる。その意味で，調査を開始した当初我々個人レヴェルにおいては，デャドヴォ遺跡の発掘が必ずしも特定の問題解決にとって必然的に実行されなければならない，「問題設定・解決型」調査である，とは言い難い面をもっていたように思われる[5]。

第2に挙げるべき点は，日本の調査団では初めてヨーロッパ地域において比較的長期にわたる継続的，定点的調査を行ってきたことであろう[6]。これは前述したように，現地政府と大学との間で調査協定が結ばれているため，比較的安定した環境で調査の継続が計られてきたからである。地元において「調査基地」が準備されていることも，調査の安定的継続を可能にする重要な要素である[7]。

第3に，ブルガリアでの調査は真の意味での国際共同調査となっていることが挙げられよう。日本人の手による海外調査の多くは，現地政府から派遣された査察官（勿論考古学の専門研究者であることがほとんどであろう）を迎え，現地国との「共同調査」の形を取りながらも，実

た。今回の調査もスケジュールの点で調査員クラスの出入りが激しく，ソフィア空港での出迎え，見送り，調査基地との往復等，ブルガリア国内での移動の世話を兼ねて，東海大学に留学するブルガリア人学生トラヤン・イワノフ氏に我々のスタッフに加わってもらうことにした。またガブロヴォ市博物館へ赴任している日本からの青年海外協力隊員田島夕美子氏がブルガリア側調査スタッフとして現地で参加することとなった。それぞれの調査隊に相手国の青年が加わり，国際共同調査の雰囲気が更に増進したように感じられた。またソフィア大学やヴェリコ・タルノヴォ大学の考古学専攻生も多数基地に合宿するようになり，昼の調査現場や夜の資料整理の際に互いの交流も進んだ。

今回の調査は一連の調査の締め括りを目指し，区切りをつけるという意味を持っていた。そこで調査の主眼をK・L/23区サブ・トレンチの銅石器時代層までの完掘と土層堆積図の完成，特大型カマド最下部の確認，10号住居の完掘，及び「礫敷き道路」下部の精査に置き，それ以外の時間と人手を，既に発掘されて基地内に袋詰めされていた遺物類の再整理と分類・保管作業に割くことにした。後者の作業は収納ケース200箱を現地で購入し，収蔵庫に保管するということで一応の目的を達成した。これらの資料は今後の本格的な整理・分析作業を待つことになる。

現場作業としては，前年度の調査で一部検出されていた10号住居がM・N/23区全面で調査された。その結果堅緻で良好な床が少なくとも2面検出された。しかしこれらの床も住居全面には拡がらず，住居の輪郭を掴むことは困難であった。住居床面より女性を象った人物土偶が1点検出され，「ミス・デャドヴォ」として地元の新聞にも報道された。これは1990年に次ぐ2例目の検出となる。この住居床面からは石鏃も検出された。L/23区の特大型カマド地区からは166号カマドの下に同様のカマドは存在しないことが明らかとなり，166号カマドをもって一連の特大型カマド構築の最初とすることが確認された。我々の調査区のN/24・25区で一部検出されていた「礫敷き道路」は，今回は「道路」を構成する礫と，その範囲内で多数検出された獣骨，土器片の微細図を作成した。この「道路」が8号住居址よりも下に面をもつことも確認された。

帰国後「ミス・デャドヴォ」発見の顛末と意義を『ミス・デャドヴォの発見――ブルガリアでの第13次発掘調査から』と題して東海大学新聞（1999年10月20日号）に発表した。また第12次，13次調査に参加した学生によりデャドヴォ遺跡検出カマドの集成的研究が『ブルガリア青銅器時代のカマド考――デャドヴォ遺跡の分析から――』と題して「卒業論文」でまとめられた（久須美玲子2000）ことも，我々の調査が学生の教育・研究に直接反映された具体的例として大きな意味をもつものであろう。この年の調査内容も学内の研究会（バルカン・小アジア研究会）及び西アジア発掘調査報告会で報告された。

Ⅲ．調査の性格と問題――まとめにかえて――

1956年に戦後最初の海外発掘調査が江上波夫教授を団長とする東京大学イラク・イラン遺跡

尾誠敏，川名広文（立教大学，本学非常勤講師），會田信行，土井義行，鴫原靖彦（本学卒業生，財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団），望月里子，茅野強（本学卒業生，我孫子市教育委員会）の各氏，及び学生・卒業生等を含んでいた。

調査方針は以下のように定められた。①青銅器時代文化層の始まりを確認するため，中央セクション壁沿いにサブ・トレンチを入れて銅石器時代層まで掘り下げ，全体の土層堆積図を作成すること，②そのため，平面調査の範囲もグリッド番号の23列（J～N/23）西半分に限定し，その他の地区については一部を除き調査を行わないこと，③L/23区の特大型カマド（カマド162）については，その上下に重複している同様の特大型カマド（カマド88と166）との関係をより詳細に把握し，且つカマド構築のプロセスの復元に努めること，④カマドの使用状況を客観的に評価するための一つの手段として，カマド硬化面に対する「帯磁率」測定を行うこと，その他である（*Djadovo Studies* 2　p.23　1999）。M/23区から検出された10号住居は，その上で検出されていた5号，8号の2つの住居との層位的関係を根拠に，この地域で繰り返された居住の連続と中断に関して具体的なデータを与えてくれた。同様に一連の特大型カマド（カマド52, 57, 88, 162, 167）に関しても，その使用系列に見られる継続期と断絶期に関する見通しが得られた（*Djadovo Studies* 2　p.108）。以上の所見をもとに，薄く複雑な堆積を示す生活面を整理し，集落の変遷を復元する手がかりを掴んだのである。サブ・トレンチの調査により初めて銅石器時代の「遺構」（角礫集中区，小ピット群，土器溜まり）が検出されたことも成果の一つである。

現地滞在中，たくさんの訪問者を基地で迎えることが恒例であるが，この年もソフィアの日本大使館から本村宏明文化担当理事官を迎えた。調査基地の整備について大使館からの協力の可能性について意見を交わした。ブルガリア国内各地域に赴任して活躍している青年海外協力隊の諸氏からもそれぞれの地域の考古学情報を知る上で貴重な話を伺うことができた。現地のジャーナリストの取材を受けることも毎年のようにあるが，この年は地元ノヴァ・ザゴラ市のケーブル・テレビ（ヤニツァ・カナルTV）の取材を受け，我々のデャドヴォ村での調査活動が『デャドヴォ1998――日本・ブルガリア共同発掘調査の記録――』と題されて報道，紹介された。

帰国後の1999年1月，筆者は日本学術振興会の発行する「学術月報」誌上において『ブルガリア，デャドヴォ遺跡の発掘調査――国際共同調査の一実例――』と題して調査の概要とその周辺を紹介した。なおこの号の「学術月報」誌は「遺跡調査の国際協力」と題する副題のもと，海外における国際共同調査の実態を概括し，今後を展望する特集号であった。また同年3月，日本西アジア考古学会の主催する「西アジア発掘調査報告会」において『ブルガリアの青銅器時代――テル・デャドヴォ遺跡』と題する報告をおこなった。

（3）第13次調査：　1997年から始まったプロジェクトの最終調査が1999年8月～9月にかけて実施された。通算13回目の調査である。調査参加者は筆者を代表者に，関根孝夫，田尾誠敏，會田信行，土井義行，茅野強，武藤健一（本学卒業生，千葉県八千代市教育委員会），辻村真弥（鎌ヶ谷市郷土資料館），川口武彦（筑波大学大学院）の諸氏及び学生等8名であっ

4．調査第3期（1997年～1999年の調査）

【全体的状況】

1997年から1999年までの3カ年の発掘調査は，『ブルガリア・トラキア平野所在先史遺跡の考古学的調査・研究』という研究課題のもとで，筆者が代表者として文部省科学研究費（国際学術研究）の支給を得て実施されたものである。

この3カ年の調査に当たり，東海大学とブルガリア科学アカデミー付属考古学研究所との間で新たに調査協約が交わされた。我々は青銅器時代文化層の調査収束を視野に入れつつ，3カ年の研究の第一目標に，デャドヴォ遺跡の調査を通じて，トラキアにおける銅石器時代から青銅器時代への移行の実相を明らかにすることを掲げた。そのため調査範囲をJ～N/23列に限定，更に中央セクション壁際の幅1mをテスト・トレンチとして先行調査し，土層堆積図を完成することを目指した。調査報告書のスタイルも一新された。従来調査概要の報告を掲載していた『バルカン・小アジア研究』が経済的理由で休刊を余儀なくされたため，単独の発表機関として“*Djadovo Studies*”を創刊，版も大判にして従来よりも更に詳細なかたちで調査内容を報告するようにした。またこのシリーズ名で明らかなように，英文編を積極的に併載し，単に調査報告だけでなく，研究報告の発表も意図した。日本西アジア考古学会が主催する発掘調査報告会にも参加，報告するようになったのもこの時期のことである。

調査団の組織の点からいえば，この第3期では，従来より継続して調査に参加していた各調査分担者がそれぞれの抱えた仕事のため，全期間にわたる調査参加が不可能となる状態が恒常化した。そのような時にあって，各地の行政機関に所属して遺跡調査の第一線で活躍している本学卒業生が調査に参加するようになり，発掘調査，遺物整理の各分野で多大の協力を得ることができるようになったことは，調査の円滑な実施と継続に何よりの助けとなった。

（1）第11次調査：　1997年8月～9月の20日間にわたって実施された。参加者は筆者を研究代表者に，関根孝夫，田尾誠敏，宮原俊一（東海大学文学部助手）の各氏，東海大学文学部非常勤講師會田信行（地質学），卒業生の土井義行（水海道市教育委員会），望月里子（千葉県埋蔵文化財センター），勅使川原玲子の各氏，及び考古学専攻生5名であった。

この年の調査で得られた知見は「報告書」の結語の項にまとめられている（*Djadovo Studies* 1, p.60　1998）。まずM/23区の住居地区から，以前調査された5号住居の下に，床を2回以上貼り替えた住居が一軒検出されたこと（8号住居），これらの住居地区南側に小礫を敷き詰めた堅緻な一画が検出され，集落内を東西に伸びる中央道路の可能性が論じられたこと，カメの甲羅を納めた土坑が検出され，当時の祭祀・儀礼について新たな資料を得たこと，銅石器時代層から青銅器時代層の間には漸移層が認められ，従来の有力な仮説であった民族移動を伴う文化の荒廃と急激な転換を示す所見はデャドヴォ遺跡からは得られなかったこと，等が明らかとなった。

（2）第12次調査：　第12次調査は筆者を代表者とする調査プロジェクトの2年目であり，1998年8月～9月の31日間 実施された。調査参加者は筆者のほかに関根孝夫，金原保夫，田

に並び，そこより南には遺構が検出されていない。恐らくここに東西方向に伸びる「道」があり，その道に直交するように，一定のまとまりをもって住居群が建てられたものと推定された。住居の北側は床の存在が不明瞭であり，「環濠」地区には特大型のカマドが構築された。その一つで今回調査された88号カマドは直径230×200cmを測り，壁高も30cm程残っていた。この特大型カマド地区の北側は再び住居地区となる。今回調査された7号住居やK/24区で検出されたピトス群はその痕跡であろう。カマドに接してはじめて検出された乳児の埋葬も，逆に成人の埋葬地区が居住区の外側にあったことを伺わせる資料となった。このように「集落」の構造について，従来の断片的な情報を補強する資料がこの年の調査により得られたのである。

1995年5月に東海大学を会場として開催された日本考古学協会第61回総会研究発表において，デャドヴォ遺跡の従来までの調査概要が禿仁志，金原保夫，田尾誠敏の連名により発表された。また研究発表に先立って，東海大学によって招聘されたブルガリア科学アカデミー付属考古学研究所上級研究員ヴァシル・ニコロフ教授により『アナトリアとバルカン半島の関係にみるブルガリアの新石器文化』と題する特別講演が行われた。また考古学協会開催期間を挟んで，東海大学構内でデャドヴォ遺跡の発掘調査に関する展示会を開催し，東海大学考古学研究室によるブルガリアでの調査活動が積極的に紹介された。

（3）第10次調査：　1993年より継続された科学研究費による最終調査（通算第10次調査）が1995年8月～9月にかけて実施された。調査団の構成は関根孝夫（団長）以下金原保夫，田尾誠敏，宮原俊一の諸氏に筆者の5名であったが，現地にて学生4名，及び天理大学桑原久男氏，松戸市教育委員会大森隆志氏等，研究者の参加協力を得ることができた。調査基地はこの時までにノヴァ・ザゴラ市の手により整備が進み，単に宿泊施設だけでなく，厨房施設や集会施設，遺物の収蔵施設などを備えた，名実共に「調査基地」にふさわしい施設として変容しつつあった。将来的には展示施設を備えた，ブルガリアにおける青銅器時代の研究センターとして位置づけたいとの構想が示され，資金協力の依頼がなされた。

さてこの年の調査の主眼は，青銅器時代文化層の調査収束へ向かって見通しを得るため試掘抗を調査区内3箇所に設け，青銅器時代文化層とその下の銅石器文化層の関係を把握することに置いた。そのため中央セクション壁の一部について土層堆積図の作成を行った。また調査区内の掘り下げレヴェルをそろえるために，調査が遅れていた北側地区を重点に調査を進めた。その結果調査区最北端において，青銅器製作のための土製鋳型と，溶銅を入れたと推定される小鉢形土器（坩堝）が，カマドの燃焼面上から共伴して検出され注目された。遺跡内で青銅器の製作が行われていたことを示す資料であった。この地区からは7号住居の一部が検出されており，その床下から5例目となる青銅製品も発見された。特大型カマド88の調査も進み，燃焼面の作り替え，下部構造あるいは焚き口部についても重要な所見を得ることができた。

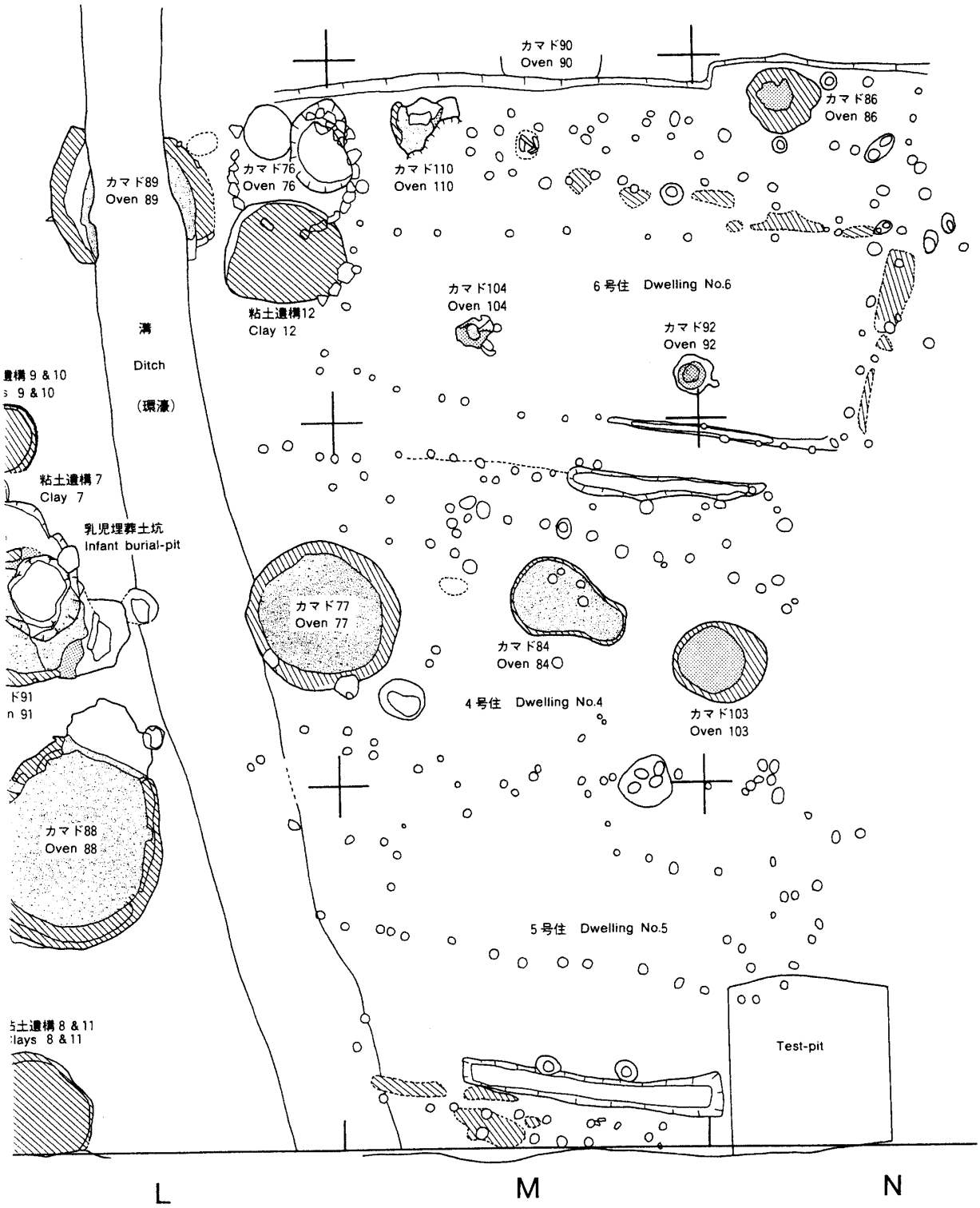

図4． 並列する住居群（4，5，6号住居址）　（デャドヴォ 1994より）

なったのもこの時期である。また遺跡脇に建てられた調査基地に宿泊が可能となったことも，調査のあり方に大きな変化をもたらせることとなった。そしてこの時から東海大学学生のヴォランティア参加が恒常的に始まり，合宿を通して一日24時間，効率良い調査が可能となった。カマドを中心とする単体遺構の調査が学生によって進められ，調査遺構数も従来よりも遙かに増加した。調査資料の整理・報告書作成作業においても参加学生の助力が得られるようになり，遺構の発掘調査から報告書作成まで一連の過程を学生に体験させることを通し，考古学専攻生の実地教育としての役割も果たすようになったといえる。

調査基地内での合宿に関して言えば，実は1992年に最初の試みがなされていた。この年の8月から9月にかけ，政変後の国内の状況と遺跡の管理状態の把握・確認，及び今後の共同調査継続の可能性についての情報を得るために，関根，金原，筆者の3名が大学予算によりブルガリアを訪問した[4)]。この時関根及び筆者は建築途中であった調査基地に2週間宿泊し，基地内でそれまで未整理であった遺物の実測作業を行った。この時の経験と情報が翌年からの調査計画を策定する際の出発点となったのである。

（1）第8次調査：　前述したように文部省科学研究費（国際学術研究）の交付を得て1993年8月～9月にかけて実施された。調査参加者は関根孝夫（団長），近藤英夫，金原保夫，田尾誠敏（東海大学文学部助手），宮原俊一（東海大学大学院生）の諸氏に筆者の6名であり，現地で東海大学の学生10名（すべて考古学専攻生）が参加した。多数の学生の参加と調査基地内での合宿により効率的に調査が進められたが，特にM・N/24区で3号住居の下層から検出された4号住居と，それと軒を接して並ぶ5号，6号住居の確認は，青銅器時代集落の姿を彷彿とさせる初の資料となった（図4）。4号住居も最低2枚の床の貼り替えからなっており，それぞれにカマド，炉が付随していた。南東壁際で検出された「埋甕」も興味深い資料である。カマドに関していえば，特に57号カマドの調査が注目される。このカマドは直径220cmを測る特大型のカマドであり，その上層で調査された52号カマドもやはり特大型のカマドであった。そして更に下からも同様の特大型カマド（88号カマド）の壁体部が検出された。これらはすべて残存状態が良好であり，同一箇所に代々特大型カマドが構築され続けていたことを示している。この年の調査でも青銅製品が2点検出された。

（2）第9次調査：　前年に引き続き科学研究費の支給により1994年8月～9月に第9次調査が実施された。調査参加者は関根孝夫（団長），近藤英夫，金原保夫，西秋良宏（東海大学文学部講師），田尾誠敏，宮原俊一の諸氏に筆者の7名であり，更に東海大学学生，卒業生，大学院生計10名が現地で調査に参加した。今回も日本隊としては規模の大きな調査参加であった。

前回検出した4号，5号，6号住居の精査から調査を開始し，6号住居についてほぼその範囲をおさえることができた。図4に見られるように，これらの住居は長軸を南北に持つ長方形の住居で，幅50cm程の小路によって各住居が隔てられていた。住居の南側の短軸はほぼ一列

が生じ，東海大学（トラキア発掘調査委員会）とブルガリア側との間で幾度かの書簡のやりとりがなされた。そして翌年の第7次調査の際，尚樹団長がソフィアでブルガリア側との協議を経て最終決着を目指すこととなった。

（7）第7次調査：　1990年8月～9月にかけ東海大学の費用負担により実施された。調査参加者は尚樹啓太郎，関根孝夫，金原保夫の諸氏と筆者であり，現地にて宮原俊一（当時東海大学学生）が参加した。学生参加の第一号である。

今回の調査は，前年の秋以来東欧諸国を席巻した政治・経済・社会の大変革期にあって，支障なく調査が実施できるか懸念された。ブルガリア到着直後のソフィアでのミーティングにおいても，尚樹団長より今回の現地調査においては例年以上に慎重且つ柔軟に対処し，状況判断を誤らないようにとの注意が与えられた。実際宿泊先のノヴァ・ザゴラ市内でも食料品を始めとする日用品の調達が極めて困難になり，また各種の政治集会も連日のように開かれるなど，それまで感じたことのない騒然とした雰囲気に包まれていた。例年盛大に祝われていた9月9日の「革命記念日」ももはや賑わいはなく，確実に「体制」が変わりつつあることが実感された。そのような中で基地に保管してあったカメラ類，測量器材類の盗難事件も発生し，調査の円滑な実施が懸念されたのであるが，以下に述べるように例年通りの成果を得ることができたのは幸いであった。なお盗難された器材類は関係者の努力により間もなく発見，回収されることとなった。

今回は調査員数の関係もあって，調査区を「環濠」の南側の部分に限定した。例年の半分の面積である。まず前年の調査で一部が検出されていたM・N/24区の住居床面の拡がりを精査し，これを3号住居と命名した。住居の輪郭は南側，東側の一部で確認されたが，その他の部分は不明である。この住居は2枚の床面をもち，それぞれにカマド，ピトスが付随していた。床面から多数の土器と炭化木材，獣骨も検出されている。3号住居の西側，M/23区より検出されたヴァイオリン形を呈する（女性）土偶も注目された。なお次回の第8次調査で，これらの地区からは平行して並ぶ3軒の住居（4～6号住居）が検出されることとなる。

3．調査第2期（1993～1995年の調査）

【全体的状況】

ブルガリア国内での政治的，経済的，社会的混乱によりデャドヴォ遺跡の発掘調査は2年間の中断を余儀なくされた。調査が再開されたのは政情も落ち着いた1993年になってからである。この年から3年間，つまり1993年～1995年の調査は関根孝夫教授を研究代表者とするプロジェクト『ブルガリア青銅器時代遺跡の考古学的研究』に基づき，文部省科学研究費の支給を受けて実施されたものである。本プロジェクトによる調査を「調査第2期」としてまとめたのは，以下に述べるようないくつかの新しい状況を指摘できるからである。

まずこの時以降オランダ隊の参加がなくなり，デャドヴォ遺跡の発掘はブルガリア・日本2カ国の共同調査として行われるようになったことが挙げられる。調査区域も遺跡の東半部だけに限定され，それまでの遺跡全面にわたる大規模，人海戦術的調査が落ち着きをみせるように

でM.B第4面の諸遺構を切っていることより少なくともそれ以降の構築物であることが推測された。この「濠」の発見と調査により，それまでどちらかというと各調査担当区内で独立して調査を進める感のあった3カ国の調査団が，共通の遺構を出発点として現場で互いに協議を重ねることが日常化していった。

調査区南東部のN/25区からは多数の小型カマドが重複して検出された。同一遺構が同一の場に繰り返し作られる例の一つと考えられた。

試掘抗で露出土層の断面剥ぎ取りを行ったのもこの時の調査である。その「作品」はノヴァ・ザゴラ市の博物館に保管されている。

遺跡踏査も24の遺跡で実施された。特にヤンボル地区のドラマ，及びスタラ・ザゴラ地区のカラスラでブルガリアにおける国際調査（前者は西ドイツのザールブリュッケン大学，後者は東ドイツ科学アカデミー）の実例を見学できたことは収穫であった。

現地調査終了後の1989年1月，デャドヴォ遺跡調査責任者であるD.ゲルゴヴァ教授（科学アカデミー付属考古学研究所上級研究員）を文部省科学研究費海外学術調査（調査総括）により日本に招請した。同氏は国内各地の博物館や遺跡を精力的に訪問すると同時に，東海大学，古代オリエント博物館で学術講演を行った。

（6）第6次調査：　1989年8月～9月にかけて文部省科学研究費（国際学術研究）（研究代表者：尚樹啓太郎）の支給を受けて実施された。研究課題名は「トラキア研究」であり，デャドヴォ遺跡の発掘調査だけではなく，トラキア地方を中心とする古代，中世遺跡の踏査も研究計画の主要部分を占めていた。ここでは遺跡発掘の概要についてのみ述べる。発掘調査参加者は鈴木八司，関根孝夫，近藤英夫，金原保夫の諸氏に筆者であった。調査はM.B第6面の遺構を中心になされた。主要な調査遺構は次の通りである。まずカマド52が挙げられる。本カマドは直径2m以上を呈する特大型のカマドであり，以後その下層からも連続して検出されることになる一連の特大型カマドの最上位に位置するものである。保存状態も良好で，壁体も約20cmの高さで検出された。「牛頭ピット」と呼称したウシの頭骨を土坑中に埋置した遺構は，当時の祭祀・儀礼を伺わせる興味深い資料である。今回も明確な住居址は検出できなかったが，上層から穿たれていた中世ピットの底面より調査レヴェルが下がるにつれ，住居の床面と思われる拡がりがいくつかの箇所で注意されるようになった。M・N/24区はその典型的例であり，この箇所は翌年3号住居址として調査された。

この年の調査で行った作業の一つの成果は，K区からM区に至る全長14.2mについて，その中央セクション壁東面の土層堆積図を作成したことである。この作業により「環濠」が中期青銅器時代の中～後半にごく短期間機能していたことを確認することができた。

同年の調査概報には放射性炭素年代測定結果が初めて報告された。

1989年12月にデャドヴォ遺跡報告書第1巻（中世編）“Mediaeval Settlement and Necropolis (11th- 12th Century)” が東海大学出版会より刊行された。出版後「著者名」表記について問題

郎（研究代表者），鈴木八司，関根孝夫，藤盛美郎，篠崎三男（史学科西洋史専攻），近藤英夫，金原保夫の諸氏に筆者の８名であり，留学中の田尾誠敏氏が現地で参加した。調査期日が前年より一ヶ月早まったのは，調査期間中に三笠宮殿下ご夫妻を現地にお迎えし，調査遺跡をご案内することになったからである。なお我々が調査期日を早めたために７月６日現地入りをしたオランダ隊とはすれ違いの状態となり，別個に調査を進めることとなった。

さて今回初めて滞在した６月はブルガリアで最も美しい季節であるという。今回は調査地ノヴァ・ザゴラに到着する前に「バラの谷」の中心都市カザンラクに立ち寄り，全市を挙げて行われていた「バラ祭り」を見物，カザンラク市長及び新旧の「バラの女王」と昼食の宴席を共にすることができたのは楽しい思い出である。またこの季節はサクランボを始めとする豊富な果物が食卓に並べられ，それまでの調査では経験できなかったようなブルガリアの一面を知ることができた。

今回の調査地区は従来のJ～N/23・24の10グリッド分に新たに25列を加え，合計15グリッド分となった[3)]。調査した遺構は以下の通り：中世ピット１，カマド址15，円形粘土遺構１，その他。中世ピットを除く諸遺構は前年調査された２号住居の下層より検出されたものであり，２号住居を中期青銅器時代（M.B）第３面に比定するならば，そのほとんどがM.B.第４面に属するものと考えて良いであろう（デャドヴォ1987，p.88）。

M・N/24区からは前年に引き続き多数のカマドが重複しながら検出され，カマドの構築法，構築儀礼について多くの資料を得ることができた（22号カマドの基底部内石組ピット等）。今回の調査で最も注目されるのは粘土の貯蔵施設と推測される「円形粘土遺構」である。直径約2m，深さ10～15cm程の浅い竪穴を円形に掘り，周囲に石を配してから黄色粘土を内部に詰め込んだものである。カマドや住居壁体の構築に使われる黄色粘土を貯蔵した施設と推測された。その他L/24・25区中央に東西に伸びる硬質粘土からなる「通路状遺構」の検出も注目された。（本遺構は翌年の調査で環濠埋土の上層部と判明した。）
また我々の調査区で初めて青銅製品（錐）が検出されたことも特筆される。

今回もテルの集中地区である南ブルガリア（ザゴラ地方）と北東ブルガリア（タルゴヴィシュテ地区等）を中心とする先史遺跡の踏査を実施した（詳しくはデャドヴォ1987，p.95～105）。タルゴヴィシュテ地区のテルは銅石器時代に属するものが中心で，集落構造の分析で著名なオフチャロヴォ・テル等を含んでいる。またソフィア市内の新石器遺跡スラティナを，調査担当者のV.ニコロフ教授の案内で見学できたことも有意義であった。

（５）第５次調査：　1988年７月～８月にかけて東海大学の費用負担により実施された。調査参加者は鈴木八司（団長），関根孝夫，金原保夫の諸氏に筆者の４名である。この年の調査の内容についても報告書（デャドヴォ1988）で詳しく述べられているが，最大の成果は，遺跡（集落）の東南部をほぼ円形に巡る環濠の検出であろう。この環濠は前年の調査で「通路状遺構」とした部位に相当し，我々の調査区ではL/23～25区にかけて幅1.5m，深さ1m程で連なり，ブルガリア，オランダ側調査区へ続いている。断面形は逆台形を呈し，埋土下部に大形の角礫が落ち込んでいた。その構築時期，あるいは「濠」として機能していた時期は，「濠」の上部

10号カマド（中期青銅器時代第1面に属する）の調査である。本址の土台下で検出された半分に割られた甕形土器と白色灰は，カマド構築時に何らかの儀礼が執り行われていたことを推測させた。同時に調査された1号カマドからも類例が得られている。

第3次調査での遺跡巡検は，ノヴァ・ザゴラ地区内だけでなくスタラ・ザゴラからプロヴディフ，パザルジク地区にも及び，更にバルカン山脈を越えて北東ブルガリアのイスペリフ市近郊へも足を伸ばしたことが特筆される。このうちプロヴディフ郊外のズラティトラップ（プロスカ・モギラ）はブルガリアにおける最初期のテル遺跡発掘地として学史上著名であり，またパザルジク郊外のユナツィテは現在調査中の，デャドヴォとほぼ同時期のテル遺跡である。イスペリフ郊外のスヴェシュタリ遺跡コンプレックスはトラキア古墳を中心とする遺跡群で，デャドヴォ遺跡同様D.ゲルゴヴァ教授が調査責任者となっている。

第3次調査の終了後，1986年10月～11月にかけ，デャドヴォ調査プロジェクトの最高責任者であるA.フォル教授（科学アカデミー付属トラキア学研究所所長，元ブルガリア教育相）夫妻及びR.カティンチャロフ教授（国立歴史博物館館長）が東海大学の招きで来日された。この来日に合わせ東海大学湘南校舎松前記念館において，デャドヴォ周辺遺跡の表採資料や調査中の写真パネルの展示を実施し，これらを紹介するリーフレットを発行した（デャドヴォ1897, p.85)。フォル，カティンチャロフ両教授はデャドヴォ遺跡調査の正報告書“Djadovo Vol.1”の英文翻訳原稿と添付する図版類を持参され，東海大学において報告書出版のための編集会議が開かれた。その結果ブルガリア・東海大学の間で以下のような取り決めが交わされた：

1．報告書の正式な書名は “DYADOVO-Bulgarian, Dutch, Japanese Expedition-” Vol.1, Mediaeval Settlement and Necropolis (11th - 12th Century) とする。

2．編集者はブルガリア，オランダ，日本から各2人，合計6名の名前を表紙に記載する。具体的にはA.Fol, R.Katincarov（以上ブルガリア），J.Best, N. de Vries（以上オランダ），K.Shoju, H.Suzuki（以上日本）とする。

3．出版に関わる費用は東海大学が負担し，東海大学出版会より出版する。出版に関わる実際の編集作業は日本側調査団と東海大学出版会が行う。

4．松前達郎学長の序文と，東海大学で調査した中世ピットに関するとりまとめを巻末に補論として収録する。

以上の取り決めに基づき，早速編集の実務作業が開始された。まず英文原稿（デャドヴォ遺跡中世，古代文化層調査の責任者であったB.ボリソフ氏執筆の本文とR.カティンチャロフ教授執筆の序論）の棒組印刷を開始し，その後図表類を本文中に割り付ける編集作業を行った。この作業は関根孝夫教授と筆者が担当した。現在では編集ソフトを利用してパソコンの画面上で容易に行える作業であろうが，当時はなかなか手間のかかる手作業であった。東海大学調査部分の中世ピットに関しては筆者が原稿を執筆することとなった。

（4）第4次調査：　文部省科学研究費（海外学術調査）（研究課題名：デャドヴォ＝テルの調査）の支給を受けて1987年の6月～7月初旬にかけて実施された。調査参加者は尚樹啓太

カマドの構造と構築のプロセスを復元するための良好な資料を与えてくれることとなった。

同年の第2次調査で特筆される点は，ノヴァ・ザゴラ地域内の先史遺跡を体系的，組織的に巡検したことである。これによりデャドヴォ遺跡の立地環境と先史時代における位置付けの把握が可能となった。この巡検で得られた所見は第2次調査の概報及びその他の文献中に簡単に紹介され，それ以降の調査に引き継がれていった。これらの巡検は発掘調査の終了後，まだまだ暑熱の残る夕刻時にM.カンチェフ氏の案内で実施されたものであり，その精力的な案内振りは現在でも鮮明に記憶に残されている。

（3）第3次調査： 1986年の夏，最も暑さの厳しい7月～8月にかけ大学予算により実施された。調査参加者は鈴木八司（団長），関根孝夫（史学科考古学専攻）の両教授，及び金原保夫氏と筆者である。なお現地で当時ソフィア大学留学中であった田尾誠敏氏の参加を得た。ブルガリア側のスタッフも昨年と同様であり，D.ゲルゴヴァ教授の指揮のもとでM.カンチェフ，D.ゲノフ，T.カンチェヴァの各氏がそれぞれ専門的な作業を分担し，且つ作業の全体的進行にも共同の責任を果たしていた。調査の事務はノヴァ・ザゴラ博物館館長I.ジェレフ氏が担当した。

さて今回の調査で特筆すべきことは，デャドヴォ遺跡調査報告書第Ⅰ巻「中世編」“Mediaeval Settlement and Necropolis (11th-12th Century)”刊行のための遺物写真撮影が関根孝夫教授によりノヴァ・ザゴラ博物館内で総日数7日間を費やして行われたことである。撮影遺物総数は完形土器288点を含む約700点であり，この時撮影された遺物が報告書の写真図版を飾ることとなった。

第3次の調査は前年同様J・N/23・24の10区分，計250平方mを中心に行われたが，更に25列の一部も調査区に加えることとなった。調査面は前回と同様，中期青銅器時代第3面が中心であった。調査した遺構は中世ピット1，2号住居（前年より継続），3号住居，カマド址15，等であった。

前年おおよその輪郭を明らかにしていた2号住居は今回更に詳細に調査され，新しい所見を得ることができた。これらは当該期の住居についての貴重な資料となるものである。

3号住居はM/23区より検出されたものであるが，住居壁の一部と柱穴列が確認されただけであった。この3号住居は，この地区の下層からその後連続して検出されることになる5号，8号，10号住居址群の最上層に位置するものである。

K/24・25区にも住居の柱穴様ピット列が検出された。住居番号は付けられていないが，この地区も住居の存在が予測された。これらの柱穴列はその方向が2号住居の壁方向と一致している。

M・N/24区はなお多数の中世ピットが中期青銅器時代文化層を攪乱していたため，拡がりのある遺構の検出はできなかった。しかし多数のカマドの重複がこの地区から確認されている。その重複の状態よりカマドの修復（燃焼面の張り替え，壁の補強），全面的な作り替え等いくつかのパターンが存在することが推測された。

この年のカマド調査で注目されるのは1984年の第1次調査時より調査区内に検出されていた

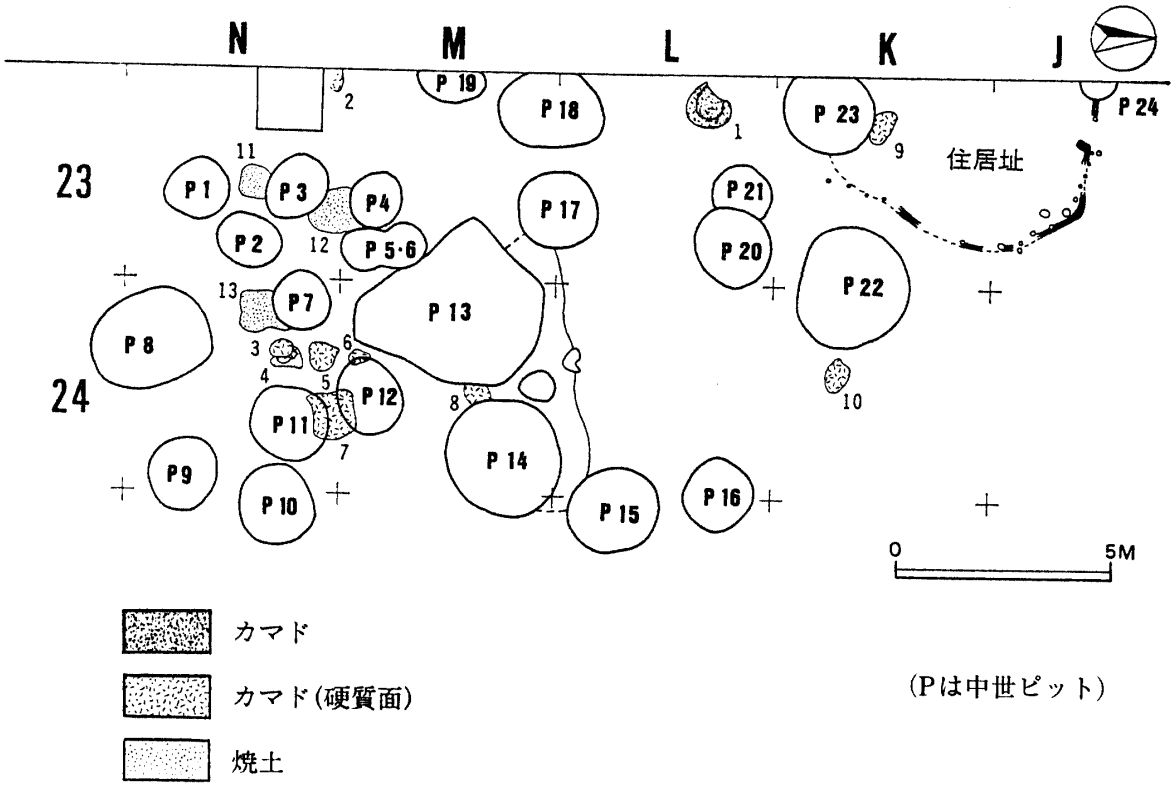

図3．1985年度調査全体図　（デャドヴォ1985より）

していた住居の全面調査が行われた。2号住居と名付けられたこの住居は，その西側が中央セクション壁中に入り，全体を明らかにすることができなかったが，方形ないし長方形を呈し，後者の場合は長軸を北東―南西方向にとることが想定された。住居の輪郭は壁体に使われていた粘土の残りにより推測することができた。住居の北壁は外側に緩やかな湾曲を示し，エゼロの同期集落でも類例のあるアプス型住居の可能性が論じられた。本住居は火災に遭っており，床面に多数の穀物貯蔵用の容器（ピトス）が作り付けられ，その内部に炭化した2種類の穀粒が遺存していた。それらは細長いコムギと丸いアワであり，それぞれ専用のピトスに収納されていた。当時の生業を知る貴重な資料となった。これらのピトスの周辺から多数の遺物が検出されている。

第2次調査で調査された青銅器時代のカマド址は15基にのぼる。その内L/23区から検出されたカマド（1号カマド）は，その後200例を数えることとなるカマド調査の先駆けとなっただけではなく，カマドの構造把握について良好な資料を提供することとなった。本カマドは全径140cmを測る大形のもので，燃焼面となる硬化面こそ残存していなかったが，その下部構造をなす「土器敷き」が，カマドの壁体（袖）となる黄色粘土の内側75×90cmの範囲にびっしりと敷き詰められていた。デャドヴォ遺跡における最初のカマド調査が，現在我々が呼称するところの「土器敷きカマド」であったのである。カマドの壁体基部となる黄色粘土の袖は幅10～20cmを測り，その内部に細い柱を立てたと思われる小穴が5つ検出された。以上の所見と，翌年の調査で検出された基底部下に穿たれた浅い土坑，及びその中央部に設けられた石組は，

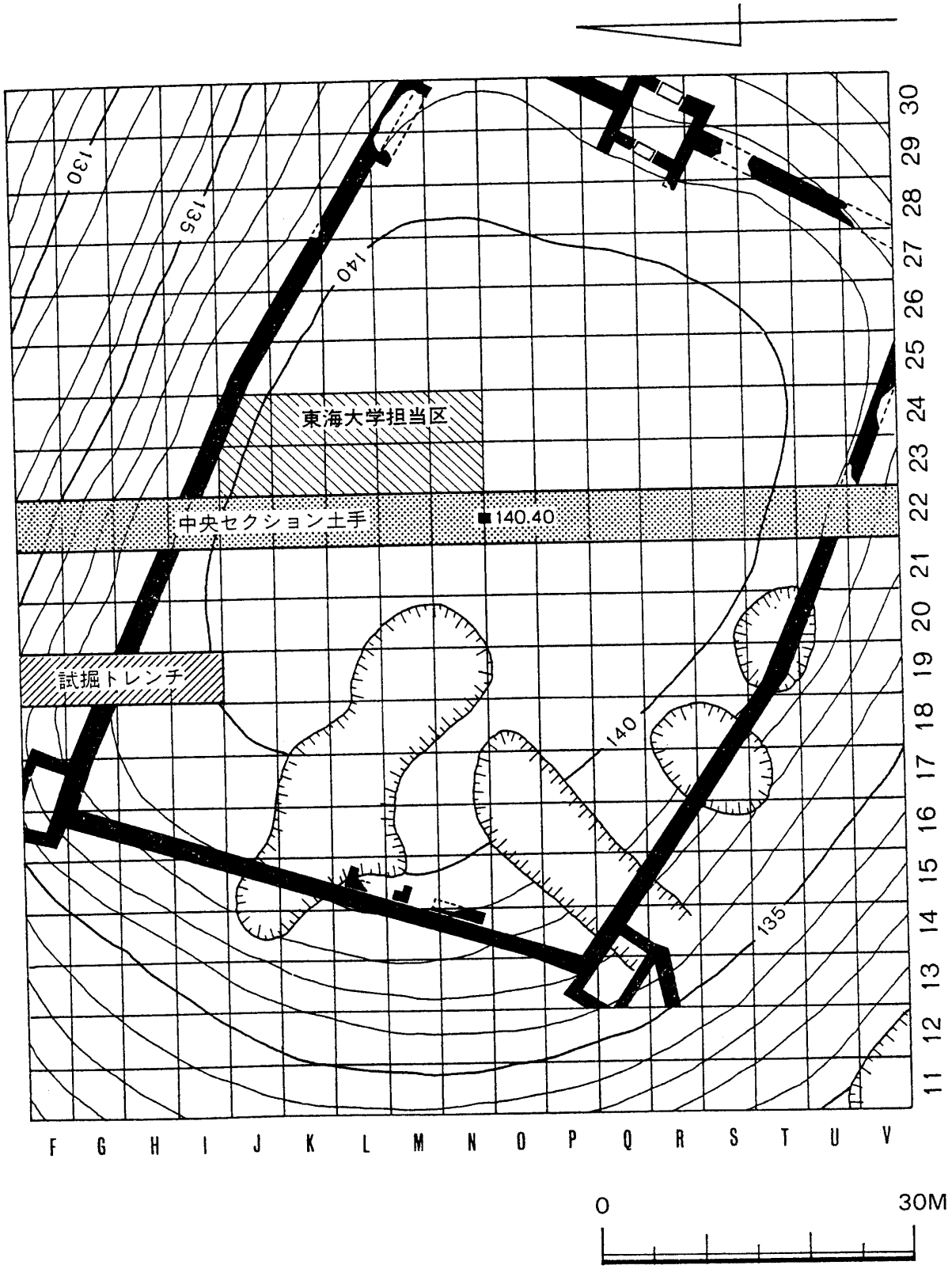

図2． デャドヴォ遺跡の全景と発掘区　（デャドヴォ 1985より）

れている遺物類より，翌年我々が2号住居址と呼ぶ住居の検出作業が行われたと推測される。

（2）第2次調査：　1985年の1月，東海大学とブルガリア科学アカデミー付属トラキア学研究所との間でデャドヴォ遺跡の発掘調査に関する覚え書きが交換され，それに基づき第2回目の調査団が1985年7月～8月にかけて現地調査に参加した。この調査は尚樹啓太郎教授（史学科西洋史学専攻）を研究代表者に，「デャドヴォ＝テルの調査」という研究課題のもと文部省科学研究費（海外学術調査）の支給を得て実施されたものである。調査参加者は尚樹啓太郎，鈴木八司，藤盛美郎，近藤英夫，金原保夫の諸氏に筆者（史学科考古学専攻非常勤講師，当時）の6名であった。この時の調査から東海大学文明研究所バルカン・小アジア研究会（後，足利記念バルカン・小アジア研究センターに改組，改称）の紀要『バルカン・小アジア研究』誌上に東海大学トラキア発掘調査団の名で調査概報が報告されることとなった。バルカン・小アジア研究12（1986）に掲載された報告『デャドヴォ遺跡（ブルガリア）発掘調査概報（1985）』（以下『デャドヴォ1985』と略称）にあるように，この時の調査は『団員の構成，発掘区域の拡大，装備などの点では，むしろ本格的調査の初回といえるものであった』(p.15)。

ブルガリア側もこの年の調査より調査スタッフに若干の変更があった。A.フォル，R.カティンチャロフ両教授を責任者とする体制は継続したが，調査の実質的な指導は科学アカデミー付属考古学研究所の上級研究員D.ゲルゴヴァ教授が受け持つこととなった。同教授の下で，青銅器時代のテル遺跡調査に経験の深いD.ゲノフ氏，デャドヴォ遺跡を管理する地元のノヴァ・ザゴラ博物館から前館長M.カンチェフ氏，及び同氏の長女で同博物館館員T.カンチェヴァ氏等が参加した。またこの年からノヴァ・ザゴラ博物館は歴史学を専攻するI.ジェレフ氏が館長に就任し，調査周辺の事務処理全般を受け持つこととなった。この体制は基本的に現在まで継続していることから考えても[2]，この年の調査はブルガリア，日本共にその後の調査体制の基礎をなしたものであった。

さて調査は遺跡北東部の10グリッド分（J～N/23・24区，なお1グリッドは5×5mの25平方m）を東海大学隊の調査区として担当し（図2），その隣接グリッドを広範囲に調査しているブルガリア隊と，そして，日本隊の調査地区と中央セクション壁を挟んで対照的な位置となる遺跡南西部の10グリッドを調査するオランダ隊と，それぞれ調整を図りながら調査を進めることとなった。なお我々の担当した地区は，前年までにブルガリア側の手で中世，古代および青銅器時代層の最上部が調査されていたため，本年の調査は「中期青銅器時代第3面」（M.B 3面，以下同じ）から始められることとなった。

当時遺跡は中世に穿たれたピットが全面に拡がり，調査の主目的であった青銅器時代の文化層を至るところで破壊・攪乱していた（図3）。そのため我々の調査もまずこれらの中世ピットの調査から始めなければならなかった。1985年の第2次調査では合計24基の中世ピットを調査した。中世ピットの規模と形態（特に断面形），立地と分布，埋土の特徴と出土遺物等についての一般的所見は1989年に出版されたデャドヴォ遺跡の正報告書第1巻中世編に補論として掲載したが，その際の基礎的所見はこの時の調査から得られたものである。

遺跡最北端のJ・K/23区はこれらの中世ピットの分布が比較的薄く，前回の調査で一部露出

ジア研究10，p.49-52，1984）によると，調査団の構成は尚樹啓太郎（教授・副学長・文学部長・ビザンティン史）を代表に，鈴木八司（教授・図書館長・考古学），藤盛美郎（助教授・ブルガリア史），近藤英夫（講師・考古学），金原保夫（講師・ブルガリア史）の各氏，調査期間は1983年10月23日～31日とある。この予備調査でブルガリアにおける各時代の遺跡の概要と，ブルガリア国内における共同調査の実態が調査された。そしてブルガリア側との協議の結果，既にブルガリア，オランダ両国で共同調査が実施されていたテル・デャドヴォ遺跡への発掘参加が決定したとある。但し同報告の「行動記録」を見ると，同遺跡の見学は僅か1時間のことであり，ブルガリア側が日本隊の発掘参加遺跡を事前にデャドヴォと決めていたらしいことが伺われる。

2．調査第1期（1980年代の調査）

【全体的状況】

ブルガリア政府の企画した「トラキア民族の起源と形成」を研究課題とする国家的プロジェクトの一環として，テル・デャドヴォ遺跡に対するブルガリア，オランダ両国の共同調査に東海大学隊が参加するようになった初期の段階を第1期としてまとめる。この時期の調査は多数の作業員を使って遺跡全面を調査するすこぶる大規模なものであり，我々はその一部を分担するという形をとった。日本隊の調査は大学予算と文部省の科学研究費の支給を交互に受けることにより実施された。調査員は全員東海大学文学部のスタッフであり，現地作業員を使いながらも自ら遺構検出作業を行い，遺構と遺物の実測，写真撮影も行った。ブルガリアの考古資料を自ら取り扱ったこの時の経験が，たとえばカマド調査のマニュアル化など，その後の調査の水準維持に大いに役立つことに繋がった。遺跡から離れた町のホテルに宿舎をとり，そこからレンタカーを使って現場を往復したが，遺跡調査の帰りにレンタカーで広く周辺遺跡の巡検を繰り返したこともこの時期の特徴である。また第1期の最終段階は社会主義政権の末期とも重なり，社会変動の波に見まわれることもあった。以下各年次毎の調査の概要を記す。

（1）第1次調査：　1984年7月～9月にかけて大学予算の支給を得て実施された。調査参加者は鈴木八司教授（文明学科西アジア課程）を代表者に，近藤英夫（史学科考古学専攻），藤盛美郎（文明学科東欧課程），金原保夫（史学科西洋史専攻）の諸氏であり，東欧史を専攻するソフィア大学留学生倉知徳幸氏が現地で参加した。調査の最高責任者はブルガリア科学アカデミー付属トラキア学研究所所長のA.フォル教授があたり，現地での発掘調査指導は青銅器時代研究の権威であるソフィア国立歴史博物館館長のR.カティンチャロフ教授が当たった。調査スタッフにはノヴァ・ザゴラ博物館館長M.カンチェフ氏とカティンチャロフ教授の教え子であるソフィア大学大学院生K.レシュタコフ氏が名を連ねていた。

さてこの第一次調査は日本側にもブルガリアでの調査トレーニングとしての意識があり，個別の地区を責任をもって分担するというよりも，ブルガリア側との今後の共同調査の可能性を探り，且つ調査も含め現地での生活全般に慣れるという意味合いが強かったと推測される。調査概報が作成されなかったため調査の具体的内容を知ることはできないが，調査基地に保管さ

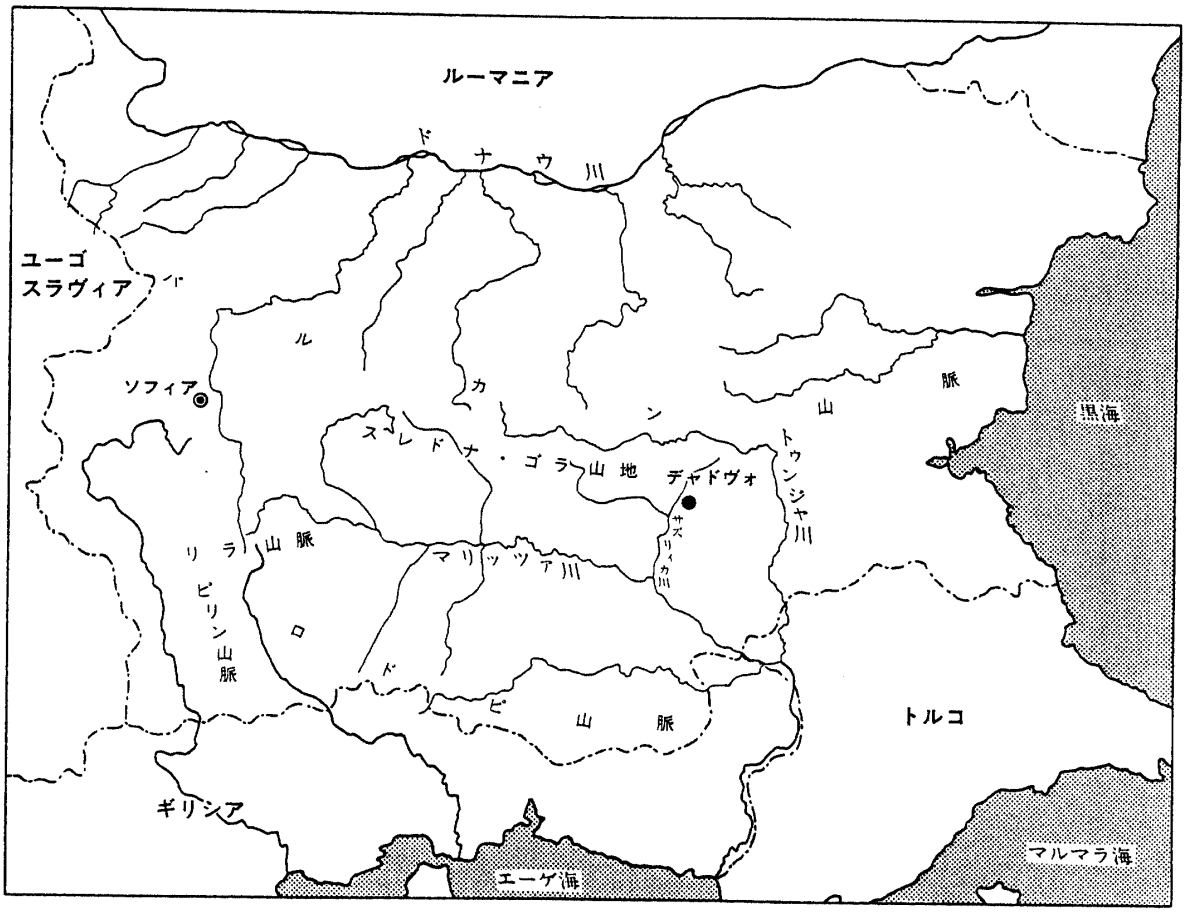

図1．デヤドヴォ遺跡の位置　（デヤドヴォ1985より）

1996年からは筆者が研究代表者となり，文部省の科学研究費の支給のもと，考古学教室スタッフ，関係者，卒業生，学生，院生の協力を得て調査を継続している。大学案内のパンフレット類にも考古学教室のブルガリア調査が紹介されるようになり，学内的にも研究室活動と認知されるようになった。

なおブルガリアで調査を開始するようになった経緯と，1992年度までの調査団組織の概要は既に別のところでまとめられているので（尚樹啓太郎1993），本稿では現場サイドからみた発掘調査の具体的内容とその周辺を，やや煩雑になることを恐れつつ，調査年次毎にまとめてみたい。これは最終報告書作成に向かっての必須のステップであるばかりでなく，大学の研究室で継続された海外調査の実態の，反省も含めた報告となるものでもある。

Ⅱ．調査関係年譜

1．ブルガリア調査に参加するまで

前記した東海大学とブルガリア国科学技術促進委員会との協定に基づき，1983年ブルガリアにおけるトラキア遺跡発掘計画に関する予備調査が実施された。その報告書（バルカン・小ア

論　文

ブルガリア調査の15年
―― 考古学教室開室20年に寄せて ――

禿　仁　志

Japanese Expedition to Bulgaria 1985-1999 : reflection and perspective

Kamuro Hitoshi

Ⅰ．はじめに

東海大学がブルガリアの地で発掘調査を行うようになってから，昨年の1999年調査で15年が経過した。その間13次に亘る調査隊が組織され，ほぼ毎年の夏，ブルガリア南東部を東西に拡がるトラキア平野中のテル遺跡「テル・デャドヴォ」"Tell Djadovo" の発掘調査を継続して実施している（図１）。この調査は東海大学とブルガリア政府（ブルガリア国科学技術促進委員会）の間で結ばれた文化交流協定に基づいて始められたものであり，東海大学内に松前達郎副総長[1]を委員長とする東海大学トラキア発掘調査委員会が，そしてその下にあって実際の発掘調査をおこなうトラキア発掘調査団が尚樹啓太郎文学部長を団長に文学部内に組織された。同調査団は1983年にブルガリアを訪問，関係者との協議，遺跡概況の調査を行った上で，翌1984年最初の発掘調査団を現地に派遣した。当初は文学部内に実施機関をもつ東海大学の調査として出発したものであり，調査費用も大学予算で賄われていた。考古学教室のスタッフも当初から調査団に加わり，現地調査と整理作業，および調査概報作成作業に携わっていたが，これは調査の内容が「発掘」という専門的な作業を伴う考古学調査であることからも当然のことであった。この時期の調査は考古学教室の教員が「トラキア発掘調査団」の団員として，個々の立場で参加していた時期であったといえる。

1993～95年の調査（第８～10次調査）は文部省科学研究費の交付を得て「ブルガリア青銅器時代遺跡の考古学的研究」という研究題目の下，関根孝夫考古学専攻主任教授を団長に実施された。この時の調査から多数の考古学専攻生が積極的にヴォランティアとして調査に参加することとなり，また遺跡脇に作られた調査基地に合宿して発掘調査と整理作業に集中して取り組めるようになった。実質的には考古学教室主宰の調査活動としての意味合いが鮮明に見られるようになった。